

クリスマス講筵

十字架を負って生まれ給いし主キリスト

——シメオン老人の預言とその成就——

2024年12月22日(京都キリスト召団集会所)

奥田昌道

ルカ伝第2章 シメオン老人の預言 十字架を負って生まれ給いし主キリスト ご恩返し 我らの生涯は報恩の生涯 自己保存本能の工ゴ 京都キリスト召団の使命と各人の課題 祈り

●ルカ伝第2章

今日のタイトルとして、次の3項目をあげました。

- I. 十字架を負って生まれ給いし主キリスト——シメオン老人の預言とその成就
 - II. 我らの生涯は報恩の生涯
 - III. 以上の視点から京都キリスト召団の使命、存在理由と各人の課題を考えてみたい。
- 1 番目の「十字架を負って生まれ給いし主キリスト——シメオン老人の預言とその成就」から始めたいと思います。

まず聖書朗読をいたします。文語訳ですが、ルカ伝の第2章。

「1その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令、カイザル・アウグストより出づ。2この戸籍登録は、クレニオ、シリヤの総督たりし時に行われし初ものなり。3さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に帰る。4ヨセフもダビデの家系また血統なれば、5既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムという処に到りぬ。6此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、7初子をうみ、之を布に包みて馬槽に臥させたり。8旅舎におる処なかりし故なり。9この地に野宿して、夜群を守りおる牧者ありしが、10主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。11御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ。12今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。13なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、是その徴なり』
14 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、
15 『いと高き処には栄光、神にあれ。』
16 地には平和、主の悦び給う人にあれ』

15 御使等さりて天に往きしとき、牧者たがいに語る『いぎ、ベツレヘムにい



たり、主の示し給いし起れる事を見ん』¹⁶乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒みどりごとに尋ねあう。¹⁷既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、¹⁸聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。¹⁹而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。²⁰牧者は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇めあがかつ讚美しつつ帰れり。

²¹八日みちて幼児わがなないに割礼を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。

²²モーセの律法おきてに定めたる潔きよの日満ちたれば、彼ら幼児を携えてエルサレムのぼに上る。²³これは主の律法に『すべて初子に生るる男子は、主につける聖なる者と称えらるべし』と録されたる如く、幼児を主に献げ、²⁴また主の律法に『山鳩一つがい或は家鴿の雛二羽』と云いたるに遵したがいて、犠牲を供えん為なり。²⁵視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔けいけんにして、イスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在います。²⁶また聖霊に、主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、²⁷此とき御霊に感じて宮に入る。両親ふたおやその子イエスを携え、この子のために律法の慣例ならわしに遵したがいて行わんとて来りたれば、²⁸シメオン、イエスを取りいただき、神を讚ほめて言う、

²⁹『主よ、今こそ御言みことばに循したがいて、僕を安らかに逝ゆかしめ給うなれ。

³⁰わが目は、はや主の救すくいを見たり。

³¹是もろもろの民の前に備え給いし者、

³²異邦人をてらす光、御民イスラエルの栄光なり』

³³かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、³⁴シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。³⁵——剣つるぎなんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念おもの頭れん為なり』

³⁶ここにアセルの族やから。パヌエルの娘に、アンナという預言者あり、年いたく老ゆ。処女おとめのとき、夫に適ゆきて七年ともに居り、³⁷八十四年寡婦やもめたり。宮を離れず、夜も昼も断食と祈祷とを為して神に事つかう。³⁸この時すすみ寄りて神に感謝し、また凡すべてエルサレムの拯贖あがないを待ちのぞむ人に、幼児のことを語れり。

³⁹さて主の律法に遵したがいて、凡ての事を果したれば、ガリラヤに帰り、己が町ナザレに到れり。

⁴⁰幼児は漸やに成長して健かになり、智慧みち、かつ神の恵その上にありき。』



●シメオン老人の預言

さきほど申したかと思いますが、大きなタイトルの一番目は、「十字架を負って生まれ給いし主キリスト」、副題として「シメオン老人の預言とその成就」と、そのように申しました。この「シメオン老人の預言」が、今朗読いたしましたこのルカ伝の箇所です。第2章28節からです。

「²⁸シメオン、イエスを取りいただき、神を讃めて言う、

²⁹『主よ、今こそ御言に循したがいて、僕を安らかに逝ゆかしめ給うなれ。³⁰わが目は、はや主の救を見たり。³¹是もろもろの民の前に備え給いし者、³²異邦人をてらす光、御民イスラエルの栄光なり』³³かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、³⁴シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。³⁵——剣つるぎなんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念おもいの顕あらわれん為なり』

この箇所ですね、このシメオン老人の預言の言葉、そしてこの通りになるわけですから。世間では、このクリスマススのことを

「ああ、クリスマスは楽しい、楽しい。クリスマスおめでとう」

とか、そう言つて、非常にクリスマスを楽しい、嬉しいことというふうに受けとつています。これは御使が、さつき読みましたように、

「¹³忽たちまちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讃美して言う、¹⁴『いと高き

処には栄光、神にあれ。地には平和、主の悦び給う人にあれ』」

と、こういう祝福の喜びの言葉があつたから、それを受けて人々はクリスマスを——いや、これはもうクリスチャンでない人でも——みんな「クリスマスおめでとう！」とか、クリスマスにはプレゼントを交換したりとか、何かクリスマスを非常に楽しいこと、嬉しいことのように受けとつて、そのように振る舞つていますが、このシメオン老人の言葉を本当に受けとつたら、そんな気楽なことを言つてられないというのが私の正直な気持ちです。

即ち、キリストはもう生まれる前からこうやって十字架を負わされていらつしやつたというこの事実がある。シメオンは一方では、イエス・キリストのことを非常に感謝して、「待ちに待つたそのお方が本当にここにおいでになった。このお方に会おうまでは、お前は天界に迎えられることはないぞ」

と、そう言われていた。そのお方に今会うことができた。

「²⁵……この人は義けいかつ敬虔けいけんにして、イスラエルの慰められんことを待ち望む。

聖霊その上に在います。²⁶また聖霊に、主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、²⁷此ことき御霊に感じて宮に入る。

ちやうど両親がこのイエスを抱いて、宮参りにやつて来た。この瞬間にこのシメオンはつ



かつかと近づいてきて、その幼児イエスを抱いて、

²⁸シメオン、イエスを取りいただき、神を讃めて言う、²⁹『主よ、今こそ御言に
循したがいて、僕を安らかに逝ゆかしめ給うなれ。』³⁰わが目は、はや主救すくいを見たり。

³¹是もろもろの民の前に備え給いし者、³²異邦人をてらす光、御民イスラエル
の栄光なり』

ここまででは非常に祝福に満ちた宣言です。ところが、お母様のマリヤに言った言葉が私の
胸を刺し貫くんです。

³³かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、
と言つてます。

「ああ、このご老人はなんと不思議なことを仰るんだらう。はや主の救すくいを見たり
とか。しかも、

「是もろもろの民の前に備え給いし者、異邦人をてらす光」

と。異邦人のことまでちゃんと語ってくれているというのは、私は非常にありがたいんで
すよ。単にイスラエルの民の救い主でとどまらない。「異邦人を照らす光」、そして「み御民
イスラエルの栄光なり」と、そう言ってくれている。このことはまず私は非常に感動する
箇所です。更に次の言葉です。お母さんのマリヤさんに対して、

³⁴……この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたん為に、ま
た言い逆いを受くる徴のために置かる。

その次ですね、

³⁵——剣しるぎなんじの心をも刺し貫くべし」

と。祝福どころか、

「あなた、大変なことになるんですよ。剣があなたの心を刺し貫く」

と、こんな不吉な預言をしている。そのことを非常に私は何か心うたれる思いがいたします。
マリヤさんにしたなら、本当にどんなに辛い宣言を受けたかと。

●十字架を負って生まれ給いし主キリスト

即ちこれは別な角度から言いますと、マリヤさんの胸が刺し貫かれるということは、イ
エス・キリストのご受難を告知しているわけです。ですから、イエス・キリストはもう十
字架を負って生まれてこられたという、そういう宿命を担って地の人となられたという、
そのことです。

マリヤさんにしても、いそいそとして喜んで宮参りに来たんでしょ。本来大きな祝福を
受けてお祝いしてもらいたいところなんです。ところが、シメオン老人が言うには、

「この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたん為に、

救いあり、審判ありというわけです。



また言い逆いを受くる徴のために」

と。「言い逆いを受くる」ということは、キリストは単に祝福されて歓迎されるのではなくて、「大変な十字架を負って生まれ給うたんだよ」

と、そういうことを宣言しているんです。だから、「剣つるぎなんじの心をも刺し貫くべし」と、そういう不吉な預言をしている。そのことを本気で受けとったら、「クリスマスおめでとう」とか、「クリスマスは嬉しいよ」とか——確かに天使は

「今日、あなた方の町に救い主がお生まれになった」

と言って、天使の喜びの歌声があつたという非常に明るい場面が描かれていた——けれども、本当のところは、このシメオン老人の預言のように

「お母さん、マリヤさん、あなたの胸は剣で刺し貫かれるんですよ」

と。つまり、

「キリストは生まれながら十字架を負って生まれてこられた」

という、その厳粛なる事実なんです。そのことを本気で受けとったら、やれ

「クリスマスだ、うれしいね、おめでとう」

なんて言つて、世間でクリスマス・プレゼントだ何だといつて、ワイワイガヤガヤやつているのは実に怪しからんことだと、私はそう思うんですよ、本当のところ。十字架を負って生まれてこられたキリストのご誕生を単に

「うれしい、うれしい。プレゼントだ、クリスマスだ」

なんて、そんな騒いでいることがあつていいのか!という、そういう私は義憤というか、憤慨、憤激を覚えるんです。おまけにクリスマス商戦という、儲けようとして利用しているでしょ。またそれに乗つかりしているでしょ。また、世間の人もね——まあそれは世間の人はキリストのことを知らんからしょうがないけれども——「クリスマスだ」と言つてワイワイワイ喜んでいる。そういう世の中の風潮に対して、クリスチャンはやはりプロテストしないといかんと思う。

「そんなもんじゃないんだよ!」

と——私なんかガラがわるいから——「なめてんか!」と、こう言いたいところなんです。「十字架を負って生まれ給うた」というこの事実を真剣に受けとったら、そんなやれ「うれしい」なんてことを言つてられないというのが私の気持ちなんです。だから、せめてクリスチャンはプロテストしてほしい。

「クリスマスなんてそんな呑気な気楽なものではないんだよ。十字架を負って生まれてくださった、そのことがお前はわかるのか。それは誰のせいかと言つたら、我々

みんなの神さまに対する反逆、言い逆らいの徴なんだ」

ということを、せめてクリスチャンは一言プロテストしていただかないと、私は気が済まないんですよ。ええ。皆さんもそんなふうにお思つてくださいましたですか、これまで。今



までそういうことがなかったら、これから思ってください。そして、

「クリスマスにはそんな気楽な、プレゼントを交換して、やれサンタクロースだ、やれ何だと言っているような、そんなものではないんだよ、本当は。十字架を負って生まれてくださった。誰のせいなんだ。我々の人間の反逆なんだよ」

と。そういうことをやはり、クリスチャンはしっかりと行っていただかないといけないと思っております。嫌われるかも知れませんが、けれども、それが本当のことなんです。

イエス・キリストはヨハネから水の洗礼をお受けになる。これは悔い改めの洗礼です。洗礼のヨハネに促されて、みんな続々とそういう悔い改めの洗礼を受けに来て。その時に、イエス・キリストもやはりやって来られて、

「いいえ、とんでもない。あなたはそんな洗礼をお受けになるお方ではない」

と、ヨハネは止めようとしたけれども、イエスは

「いや、私だって何も例外ではないんだ」

と言って、水の洗礼をお受けになった。ヨルダン川というのは、地球上で一番低い所を流れていると言われている川なんです。悔い改めを全く必要としないお方が、

「いや、私だって特別ではない」

と言って、ヨルダン川に身を沈められた。これは小池先生が仰ったけれども、

「これは、どういうことなのか。まともな悔い改めさえできない我々に代わって、

キリストが悔い改めをやってくださいったんだ」

ということを仰った。だから、イエスというお方の在り方というのは、「自分だけは特別だ」なんて思っておられない。つまり、我々と同じようにイエスは振る舞っていてくださった。つまり、我々の反逆といったものを全部、あの時からもう背負い込んでくださった。いるということなんです。だから、そういうこと一つをとって見ても、私はもうキリストの前には本当に

「ありがとうございます」

としか言葉がないんですよ。

●「ご恩返し」

私は今日のタイトルの一番目に、

「十字架を負って生まれ給いし主キリスト——シメオン老人の預言とその成就」

と書きました。正にキリストのご生涯を見ますと、その通りですよ。しかも、それも生まれながらにしてそういう十字架を負ってこの世に送られて来られたと、そういう事柄です。それを本当に受けとりますと、

「我々の生き方はどうなんだ、どうなっていくのが我々らしい在り方なのか」

ということを考えますと、私は「ご恩返しししかないと思います」。



世間の人はいろいろ自分が不幸な目だとか、いろんな事に遭いますと、

「神も仏もあるもんか!」

とか、なんだかんだと文句を言いますよ。私はそれに対して、

「あなたは神さまや仏さんを本当に大事にしてきたの?」

と。何か自分が変な目にあつたら、「神も仏もあるものか!」なんて偉そうなことを言っているけれど、「あなたの日頃はどうかだったのか?」と私は聞きたいような気持ちになります。そんな気持ちになるというのも、そもそもイエス・キリストご自身がもう十字架を背負って生まれてくださったという、そしてそれを黙ってお受けくださったという、そういうイエス・キリストのご生涯ということを思います。そして、イエス・キリストの十字架は誰のためだったのか、ご自身のためではありませんでした。ご自身は祈っていれば直ちに眩い姿になつて、そのまま天界に昇つていくお方ですよ。ところが、そのお方が十字架にかけられた。しかも神さまに棄てられたんですね。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と叫ばれた。こういう事態を、私は「クリスマスだから」といつて、それを避けておくのではなく、あのように神一筋、御意一筋みこころに自分を委ねきつて、それに忠実に生きられた。

「わが思いではなく、主よ、あなたの御意を成してください」

というキリストの生き方は、あの「主の祈り」にうたわれていますように、まず

「聖名を崇めさせてください。御意が天において成っているように、この地に

も成らしめてください、この身を通して」

と、そういうふうにご自分を献げきつた祈りを貫いてくださったお方ですよ。そのお方が実は生まれながらにして十字架を負つておられるということをごシメオン老人はお母さんに対して言っている。お母さんたちは宮参りに、いわば感謝の献物をしようとしてやって来たわけです。だから、お母さんは、「両親は喜んでいらっしゃいますよ。そういった喜んでいらっしゃる前にして、特に母親であるマリヤさんをつかまえて、シメオン老人はこんな不吉な預言をしたわけですよ。」

「視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たたん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。」

反逆をされますよと。救い主ともあろうお方が言い逆らいを受ける。そして、

剣つるぎなんじの心をも刺し貫くべし」

「お母さん、あなたの胸は剣で刺し貫かれるんですよ」

と。つまり、生まれながらにして十字架を負わされてお生まれになった。そしてそのことをシメオン老人は正直に告白している。そして、マリヤさんを祝福するどころか、

「あなたはこれから大変な定めを背負って生きなければならぬですよ」

と。そういうことを言われて、本当にマリヤさんは辛かっただろうと思っんです。そういう



うことをやはり、クリスチャンである方々はしっかりと受けとめていただきたいと思います。

●我らの生涯は報恩の生涯

そうしますと、次に二番目のお話に移るんですけども、

「私たちはどのような生き方をするのがよいのか」

という話です。世間では、大変お世話になったら、何とかご恩返しをしたいと思えますよね。ご恩返しというのはやはり、お世話になったという現実があるから、それに対して何とかお礼をしたい、感謝の気持ちを表したい、それを形にしたいという、そういう人間として自然な思いが出てくるわけです。それが報恩ということですよ。

そうしますと、それでクリスチャンの方は、

「いったい自分はこういうご恩を受けてきたのか、自分はこういうご恩返しをすべきなのか」

と、そのことの思いをいたしていただきたいと思うんです。世間みたいに、「やあクリスマスだ、うれしい、うれしい」なんて言っている場合かと。さっきのシメオン老人の預言を取り上げても、

「お母さん、あなたの胸は剣で刺し貫かれるんですよ」

と、そういう不吉な預言をもらって、しかもそれが現実になったわけです。そうすると今度は、私たち一人ひとりはいエスさまから何をいただいたのか、どういうご恩返しが必要なのか。そっちの話になるんです。

これが非常に大事なことですよ。我々人間はやはり、

「お世話になったら何かお礼をしたい、お世話になったらお返ししたい、何かご恩返しをしたい」

と思いますよね。そうすると、どれだけご恩を受けたかという、その受け方によってご恩返しの内容も程度も変わってくるんです。そうですね。

「命懸けでご恩返しをしたい」

と、そこまで思わせていただいたかということですよ。

ネロの迫害とかいろいろありました。あの時代のクリスチャンたちは本当に命懸けでした。その後も、クリスチャンはいろんな迫害にも曝されてきました。日本でも「二十六聖人」とかいうカトリックの聖徒のお話もありますし、大変な運命を背負わされて、まあ言うならば「地上では何もいいことはなかった」という生涯を送られる方もありますよね。けれども、どんなことも、私から言えば、我々はいつたい、各人、クリスチャンお一人お一人はどれだけキリストから受けてこられたか、その受けとり方、その深さ如何によってその人のご恩返しの内容も変わってくると思うんですね。



「イエス・キリストを信じたつて、何もよいことはないわ。イエス・キリストを信じたつて、しんどいばかりやわ」

なんて文句を言っている人は、どれだけのご恩を受けたかということがわかってないんですよ。本当にどでかいご恩を受けてしまったら、

「このご恩は一生かかってもお返しできません」

という、まあよく世間ではありますね、本当に助けてもらった時には、

「このご恩はもう生涯忘れません。一生かかってもお返しできないくらいたくさんのご恩を受けました」

という方もいらつしやるでしょう。

つまり、我々のご恩返し、報恩は我々が神・キリストからどれだけのものをいただいたか、それによつて、その受けとり方によつて我々のご恩返しも変わつてくる。こう思うんです。何もクリスチャンは特別に出来がいいから、ご恩返しをたくさんする。そんなのではないと思う。人間はみんな同じですよ。みんなエゴイストなんです。みんな自分のことしか思つてないんですよ、神さまのことなんかより。

「だいたい、「日本人」なんて言つたら失礼ですけども、神信心は自分の幸せのためです。

「神さまの聖旨みむねのために、御意みこころが成るようになつて、神中心で信仰するのではなくて、「信仰」といえば、自分が幸せになりたいために信仰する。」

「自分を幸せにしてくれないような神さまなんて蹴飛ばすよ」と。そうでしょ。普通はそうなんですな。

「なぜわるいか。神・仏は人間を幸せにするために存在しているんだ」

と、こうくるわけです。自分が主であつて、神さま・仏さまは自分の子分みたいなもの。そう考えているのがほとんどですよ。だから、

「あそこに行つたら御利益ごりやくがある。ここは靈験あらたかだ」

という全部、人間に仕えるのが神の役割であつて、人間に仕えて人間を幸せにしないような神さまは蹴飛ばすよと。これが「日本人の」と言つたらわるいかも知らんけれども——まあどこの国も一緒かも知れませんが——人間は自分が主なんです。神とか仏とか何とかは全部、自分の子分なんです。自分に仕えるなら、自分を幸せにするなら、拜んでやつてもいいという。だいたいそれが一般ではないですか。

それに対して我々が導かれてるキリスト道というのは全くそうじゃないでしょ。そんなことはもう言う必要もない。でも、そのくらいに、私が今日申し上げたいのは、自分がどれだけ神・キリストからご恩をいただいているか。その深さ高さ偉大さ、それによつて自分がキリストのために、神の国のために、自分を献げていこうというそのご恩返しも違つてくるというのが、私の正直な気持ちなんです。



人間が立派だからとか、どうかこうとかという、そういうのではなくて、私から言えば、どれだけご恩を受けたか、それによつてご恩を受けた人のご恩返しも変わってくる。人間というのはそういうもんだという、これが90歳を越えた私の考えなんです。人間とはそんなに大きく変わるものではない。

本当にご恩を受けたら、誰だつて本当にご恩返しをしたい、そうではないのだろうか、というのが私の気持ちなんです。特にクリスチャンの方は、クリスチャンと称している方がどれだけ神・キリストからご恩を受けとったか、受けとっているか。その受けとり方の深さ高さ大きさによつて、我々の神・キリストへのご恩返しも変わってくるのではないだろうか。その人が立派だとか、出来が良いからとか、そんなのではないというふうには今、思っているんですよ。

昔はそんなことは思わなかったでしょう、多分ね。けれども、今の私の気持ちとしては、我々はどれもこれも五十歩百歩なんです、神さまの目から見たら。日本では、「エベレストが高い、どの山がどうだ」と確かにありますよ。でも、遙か宇宙の向こうから地球を見たら、そんなに高い低いもないのではないのでしょうかというふうな気持ちなんです。

要するに、私が申し上げたいのは、本当に私たち一人ひとりが神・キリストからどれだけの深いご恩を受けとっているか。その受けとり方によつて、私たちのそれからの生き方が変わってくるということなんです。「出来が良いから悪いから」とか、そんなのではない。相対的にはそういうこともあるかも知れませんが、けれども、本質的には人間というのとはみんな本来、エゴイストで自分のことしか考えていなくて、自分を大事にしてくれる者は大事にするし、自分を粗末にする者は蹴飛ばすよということなんです。

●自己保存本能のエゴ

そういう、当然のことながら打算的なのが、生物体としてはしようがないんですよ。自己保存する以外、誰も守ってくれない。そしたら、自分で自分を守るしかしようがない。別な言葉でいえば、自分を大事にしてくれる者は大事にする。そうでない者には見向きもしないという、これが非常にごく自然なことなんです。そういう自然的な人間の在り方、これが実はエゴということなんです。それで、

「エゴが罪だ」

というふうの小池先生が仰った。ということは、人間というのは自己保存本能がある限り、生物体としての人間はエゴイストたらざるを得ない。そうでないと生きて行けない。そういうことなんです。

そういう人間の「出来の良し悪し」なんかではなくて、我々は、小池先生から言わせたら、「人間の存在そのものが神に逆らっている」

という。「罪」というのは、私が少なくともアメリカの宣教師とかそういう方から聞いたのは、



「ああいうことをやった、こういうことをやった」とかいう、人間のやったことそのことについて「罪を犯した、何をした」という。ところが、小池先生の捉えておられたのは、

「人間存在そのものが神に逆らっている」

という。では、キリストの在り方は何かというと、「主の祈り」にありますように、

「主よ、聖名が崇められますように」

と。つまり、聖名一切、神さま一切なんです。ご自分はゼロなんです。キリスト・イエスという方はご自分はゼロで、神さまがすべてである。空っぽだからそこに神さまが100%お宿りになった。だから、

「私を見た者は父を見たのである」

と仰った。ところが、人間というのはやはり自我というものが邪魔して、そんなふうになれない。そういう自我という罪をキリストはご自分の十字架で贖ってくださった。そして、私たちを本当の神の子に相應しい存在に創り変えてくださった。それが十字架の恵みです。

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや旧きエゴなるわれ生くるあらず。

復活のキリスト、御霊のキリストが新しく賜ったわが内にあつて生き給うな

り」

というパウロのガラテヤ書2章20節の告白となつて表れてくる。そのようにして十字架で我々の旧い性、エゴというものが完全に葬り去られた。キリストが引き取ってくださいました。そうすると今度は、それに代えて、キリストは我々に新しい「われ」というのをくださった。それが

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはやわれ生くるあらず。新しく生命を賜ったわれが御霊に導かれ、キリストと共に生くるなり」

といった、ああいうガラテヤ書2章20節の告白になつてくる。そこからはもう十字架というもので我々の根底、エゴが片付けられている。そういう旧き我はなくなつて、そこに新しい生命を、新しい我を下さつた。その新しい我を御霊が導いて、聖国への旅をなさせてくださる。

「もはやわれ生くるあらず。復活のキリスト、御霊のキリストわが内にありて

生き給うなり」

というあのパウロのガラテヤ書2章20節の告白がナチュラルなものとして——エゴイチックな価値観では自分からは出てこなかった——そういう在り方が、神中心・キリスト中心、そういう新しい在り方を主は十字架にかかつて、我々のそういった自我、罪、背きを引き取つて、そして、あのご復活の生命を我々に分かち与えて、神の国の民として我々を導いてくださる。それがキリストに生命をいただいて、キリストに導かれて生きて行くという、第二の我々の生き方です。これはもう恵みとしていただいている。これを私は、報恩の生涯と言いたいんです。世間的に言えば、



「このご恩は一生忘れません。このご恩はどんなにお返ししたくても、お返しできないくらいでかいです」

という、そういうクリスチャンが、一人ひとりが神・キリストからどれだけ大きなものを受けとっているか。その受けとり方の大小によって、その方のご恩返しもまた変わってくる。私はそういう気持ちであります。

そんなものは若いときはわからなかった。本当のところね。けれども、この歳になりますと、本当にそういうことがひしひしと感じることが出来ます。それが、

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや旧きわれ生くるあらず。復活のキリスト、御霊のキリストわが内にありて生き給うなり」

と、そういう生き方になって表れてくると思うんですね。

●京都キリスト召団の使命と各人の課題

そういうことで、今日のお話の要点は、第一番目は、イエス・キリストのお誕生それ自体が、そんな世間で

「やあクリスマスだ、キリストが生まれた、うれしい、うれしい」

なんて言っているのではなくて、そもそも「十字架を負って生まれ給うた」という厳粛なる事実にもまず目をとめてほしいということ。イエスはそれをそのまま受けとって、そういうご生涯を貫かれた。神に献げ切った生涯を貫かれた。キリストの生涯というのは、神に仕え人を愛すること、己を神と人に献げ切って生きてくださったご生涯であったという、それが一つですね。そのことを

「十字架を負って生まれ給うた主キリスト」

と言いたい。

そして、我々はそういうキリストからどれだけの深いご恩を受けとっているか。その受けとり方に応じて、我々の生涯の中味が変わってくる。言い換えれば、我々の生涯というのはご恩返し生涯である。そういうことですね。そのことをこのクリスマスにはつきりと自覚しておきたい。

こういう視点から、京都キリスト召団の使命、役割、存在理由と、それから各人が賜っている課題を考えてみたいと思う。もう時間もございませぬので、要点だけ申し上げますと、私たちの在り方は、「十字架と聖霊」ですね。いつも申し上げております。十字架で、

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや旧きわれ、エゴなるわれ生くるあらず。御霊のキリストが新しく賜ったわが内にありて生き給うなり」

それを一言で言いますと、十字架を土台にして聖霊に導かれて生きて行く、そういう生き方。そこに神・キリストの御意が成就していきますように。

「御意の天において成っている」とく、地にもこの身を通して成らしめてくだ



わこ」

と。かつての自分は、「自分のこと、自分の幸せ」のために神・キリストを利用する、そんな自己中心の在り方であったのが、

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはやそういうエゴなるわれ生くるにあらず。新しき生命を賜ったこの新しきわれ、御霊が内住し、御霊が導いて御意をこの地に成就せしめ給う」

と。そういうふうにして、己を神・キリストに献げ切つて、

「御意が天において成っているごとく、この身を通してこの地にもどうぞ御意が成りますように」

ということ。「自分がどうのこうの」ではなくて、

「御意が成りますように。あなたが私において、私に関して抱いていらつしやる御意、使命、それをどうぞ私によく悟らせて、そして忠実で在らせてください」

というふうに分を献げて生きぬくといった——今までのエゴなる自分ではなくて——神・キリストの中心の新しい生き方、これが私は天国人としての生き方だと思えます。それが天地を貫いて、私たちを本当の神の民、天国人として私たちを御意にかな適う生き方をさせてくれる、そういう事態だと思っています。

ですから、なにもクリスマスだからといって、特別なお話をしているわけではありません。けれども、せめてクリスマス、イエス・キリストのお誕生に思いをはせる、そういう機会にもう一度改めて、自分たちは神・キリストから如何なる恵みを受けているのか、如何なるご恩を受けているのか、そのことに思いをいたし、今度は自分たちの生涯というものは本当にご恩返しのの生涯であると。「あれしてくれ、これしてくれ」なんていう、おねだりの生涯ではなくて、何とかして、

「主よ、あなたから賜った限りなきご恩に対して、如何に自分が応えることができるか。応えるのも導きが必要ありません。御霊が助けてくださらなければできません。どうぞ、ご恩返しのの生涯を貫かせてください。あなたの御意がこの身において成つて行くように、どうぞ、御霊によってお導きください」

と。そういうふうな角度からの生き方に変わつてこざるを得ない。「それが幸せか、幸せでないか」、そんなことは問題ではないんですね。

最後に讃美歌を一つあげておきたい。「主のみ十字架を負わせまつり」(331番)を皆さんとご一緒に讃美しましょう。

1. 主のみ十字架を 負わせまつり、
われ知らずがおに あるべきかは。
2. 十字架を負いにし 聖徒たちの
み国によるこぶ さちやいかに。



3. わが身もいさみて 十字架を負い、
死にいたるまでも 仕えまつらん。
4. この世の禍幸まがなち いかにもあれ、
さかえのかむりは 十字架にあり。

● 祈り

ひとことお祈りいたします。

主さま、ご臨在くださってありがとうございます。また、全国各地から主にある兄弟姉妹方をここにお招きくださいます。ありがとうございます。こうして一堂に会して本当に聖名を讃え、聖名に感謝し、主を讃美することができます幸いを心からありがとうございます。御礼申し上げます。どうぞ、短い時間でございましたが、この僕の語りましたこと、それを皆さまがしっかりと受けとって、これからのそれぞれの歩き方、生き方、生涯をあなたに献げ切った主の栄光の表れのご生涯となりますように、お一人お一人をお導きください。

また、あなたがお建てくださったこの京都キリスト召団を、主よ、どうぞ末永くあなたがこれを顧みて、ここに御霊の主がご臨在くださり、ここに集う者が常に主において生きると主の僕・婢女として、聖名のために働くことができるように、御導きください。ように、希こいねがいたてまつります。

今日ここに集おうとして集えなかった兄弟姉妹のこと、また病を得ておられる方々のことをどうぞ御顧みください。ように。

この尽くしませぬ感謝と讃美、祈りを主キリストの聖名を通し、また皆さまの祈りと共に御前にお献げいたします。アーメン。

